

黄砂と蒼穹に抱かれて

不知火 景



明窓出版

こうさ そうきゅう だ
黄砂と蒼穹に抱かれて

しらぬい けい
不知火 景



明窓出版

平成十二年三月二十五日初版発行

発行者——増本 利博

発行所——明窓出版株式会社

〒一六四—〇〇一一

東京都中野区本町六—二七—一三

電話 (〇三) 三三八〇—八三〇三

FAX (〇三) 三三八〇—六四二四

振替 〇〇一六〇—一—一九二七六六

印刷所——株式会社 シナノ

落丁・乱丁はお取り替えます。

定価はカバーに表示してあります。

2000 © Kei Shiranui Printed in Japan

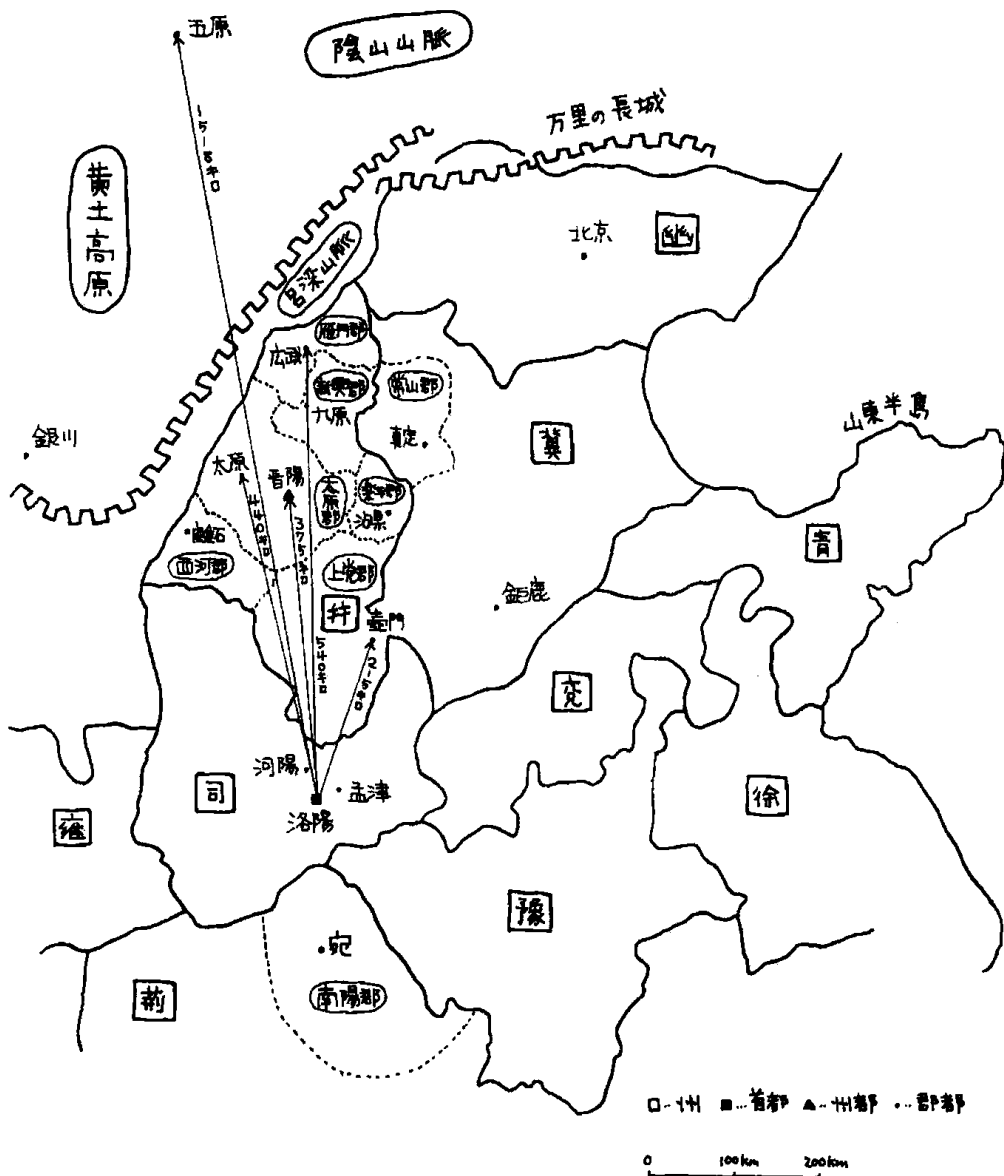
ISBN4-89634-043-4

ホームページ <http://meisou.com> Eメール meisou@meisou.com

不知火 景

黄砂と蒼穹に抱かれて

明窓出版



一、募兵の章

一

すべては、無からはじまった。

黄土高原の南に無窮に^{ひろ}拡がる国、中国。

かつて、ここには緑原、黄土、堅岩、河水が大いなる天のもと、地上で無造作に勝手気ままに呼吸をしているだけであつた。

人間などの入り込む余地は何処にもなく、ただ、天と地のみであつたのである……。

人間暦二十世紀末。

内蒙古高原を北にひかえた陰山山脈を背にし、明の朱王朝時代に造り直された万里の長城に攀じ登る。

四方を眺望し、まず眼に飛び込んでくる建物は、黄土高原の東、^{さんせい}山西省にある。

山西省の省都^{たいげん}太原市は、北京の西南約五百二十キロのところに位置している。

現在は百万をはるかに超える人口を有し、豊富な

地下資源をいかした重工業の町として、山西省の政治や文化の中心となっている。

今から約二千五百年前の春秋時代には晋が都を置き、続く戦国時代には趙の中心として栄えたここ太原は、後漢王朝の時代では并州（山西省一帯）の一地域としての地位を辛うじて保っていたにすぎなかった。

光熹元年（一八九）六月のある日。

ここは、并州の州都・晋陽である。

朝霧のなかに十人足らずの男たちが馬上に腰を下ろしている。

最前列の男がたくわえている口髭に、頭上から、かすかに光が降りそそぎ、男の額に跳ね返っている。男は、それを気に留めることもなく、しきりに口髭をこすっている。どうやら癖らしい。

その男の後ろで、河北の土とあまり変わらない皮膚の色を持った男たちが四、五人、馬脚を南に向け

て続いている。

その群れから一里（約四百十五メートル）ほど後方、手綱を力の限り握りしめ、馬からふり落とされないようにその背を両腿で挟み込んでいる男が、ぎこちなく前へ進んでいる。

その男の頭上に霧はなく、吹き始めたばかりの朝の風が、男の不自然な所作を次第にときほぐしていくようである。

四刻（一時間）後、なんとか前を行く馬群に追いついたこの色白の男の全身は、安堵感に満ちていた。（洛陽か。これで二度目だな……）

最後尾の男、曹性はそうおもった。

昨日の雨でできた道端の蒼色の水面に、少し前の朝の風が斜めに吹き降りた瞬間、さざ波が立った。が、すぐに散り失せた。

やがて、消えた波間をふたたび求めるように、風に乗ってやってきた柳絮が、すこし遠慮がちにその蒼面に舞い降りた。

曹性は、そのようすを視界が許すかぎり、馬上からずっと視^みていた。

洛陽を首都とした後漢王朝は、年数で計れば西暦二五年から二二〇年まで、約二百年間続いた王朝であるが、まともに機能したのは三代目（光武帝・明^{めい}帝・章帝^{しょうてい}）までの、およそ六十年に過ぎなかった。

四代目以降は、幼弱な皇帝が相次いで即位し、幼い帝の母にあたる皇太后が摂政として君臨するようになる^{よう}、皇太后の血縁の者は、外戚^{がいせき}として内朝^{ないちよう}（皇帝政務秘書の宮中）の権力を独占しはじめた。

かれらは、やがて掌握した強大な権力を振り翳^{かざ}し、残虐非道な収奪をほしきままにするようになる。

このような内朝、即ち外戚の専横に対して、その打倒を目指したのは宦官^{かんがん}勢力であった。

外戚の専制によって内朝が形骸化し、皇帝から疎遠^{そえん}になってしまった時、対抗勢力は皇帝のもつとも身近に侍っていた宦官以外には存在しえなかったの

かもしれない。

ときに、宦官は一時的な外戚追放には成功するが、かわって権力を握るやいなや、外戚に輪をかけて跳梁跋扈^{ちようりやうばつこ}する始末。

大豪族層からなる外戚とは異なり、自らの勢力の礎^{いしづ}を持たないかれらは、ひたすら公権を私物化するために邁進し、本能剥き出しの収奪を繰り返した。

後漢時代の中・末期の政治は、外戚と宦官の陰惨な権力抗争に終始し、帝権そのものも腐りきっていたのである。

このような虐政に対し、公然と批判の声をあげたのは、地方の中小豪族であった。

酷吏^{こくし}による略奪と絶え間なく続く天災によって、農村は疲弊の極みに達していた。

人々は生活の新たな糧^{かて}を求め、流民となって彷徨^{ほうこう}し、全国の至るところで小規模な一揆が頻発していた。

自分たちの勢力基盤がこれほどまでに悲惨な状況

に陥ってしまったのを、おもしろい知らされた中小豪族たちは、「清流」派知識人を代弁者として支持し始めるようになった。

外戚や宦官の「濁流」派を表立って批判した「清流」派が、豪族でありながらも清廉な生活を送り、新しき農村秩序を模索しはじめていたからである。が、その「清流」派も、二度にわたる党錮事件で、外戚・宦官の「濁流」派に虐げられてしまう。

中平元年（一八四）二月、呪術師の張角に率いられた黄巾賊なるものが蜂起し、全国を席卷し始めた。

新たに生き延びるための糧を求めて人々がさがし続けたのは、酷い官吏のいない、搾取のない、人間ひとりひとりが助け合いながら生きていく共同体にあったのである。

かれらの理想は、漢中に栄えた五斗米道の中にも垣間見ることができ、

中国東北地方の冀州・鉅鹿より興った黄巾賊と、

中西地方の漢中で浸透していった五斗米道に対し、危惧の念を抱きはじめた朝廷は、東西両勢力の連携をおそれて、黄巾の乱の勃発直後、正義派の中常侍（後宮の接待をする宦官）である呂強の進言に従い、「濁流」派の外戚・宦官の手で排斥させられていた「清流」派に大赦令を下した。

その結果、中小豪族たちは挙って反乱鎮圧にまわり、乱自体は一応の終焉をむかえる。

この黄巾の乱は、一種の農民一揆ではあるが、腐りきっていた朝廷に対する一大警鐘となるはずであった。

しかし、それを警鐘として真摯に受けとめ、朝廷内の綱紀粛正をはかる人物としては、第十二代の霊帝・劉宏はあまりにも脆弱・暗愚であった。

霊帝は、後宮内に市場を造り、女官連中を売り子に仕立てて、互いに品物を盗ませた。

自身も商人姿で加わって、飲めや歌えやの酒宴を繰り広げるほどの興じようであった。

さらには私財を蓄えることにうつつを抜かし、官爵を売りつけ、珍品を中国全土からあれやこれやと取りよせたのである。

中常侍の中では珍しく憂国の志を持っていた呂強の諫言にも、馬耳東風というありさま。

他の側近連中は諫めるどころか、前にも増して私腹を肥やすのに精を出す始末である。

このように陳腐墮落した朝廷内において、にわか
に新しい勢力が台頭してきた。

反乱鎮圧に功のあつた武將たちである。

かれらは、数々の戦闘を経て、地方に確固とした軍事・経済の基盤を築き上げ、もはや朝廷の一存では動かすことができないほどの実力を蓄えていったのである。

皇甫嵩、朱儁、袁紹、曹操、董卓らがその代表で、

かれらによつて担ぎだされたのが、靈帝の正室・何皇后の兄で、大將軍（臨時の最高武官職）の何進であつた。

何進は字を遂行といい、南陽郡（河南省南陽県）の産である。もとは、豚や犬の屠殺を生業としていた。

が、腹違いの美貌の妹が、靈帝に見初められて後宮に入り、寵愛をその嫺やかな肉体で一身に受け入れるようになると、何進自身も郎中（近習）に取り立てられた。

さらには、光和三年（一八〇）十二月、妹が皇后に立てられると、兄の方は、侍中（近侍武官）から將作大匠（造宮長官）、何南尹（首都圈長官）へと、とんとん拍子に出世して、ついには大將軍にまで、なつてしまった。

綺麗な妹さまさまといったところである。

何進が黄巾の乱のときに反乱鎮圧の総帥として大將軍職を拝命してから、すでに五年の歳月が流れていた。

この年の四月十一日、靈帝が崩御した。享年三十

四歳。二日後、皇子の弁が十七歳で即位し少帝となり、元号も中平六年から光熹元年へと改元された。

当時の何進は、朝廷政治の実権をめぐる宦官勢力との熾烈な政争を余儀なくされていた。

敵対する宦官を根絶やしにするために、何進は中軍校尉（一八八年に靈帝の近衛兵として新規に編成された西園八校尉の一つ）の袁紹と宦官誅殺計画をとりまとめ、妹の何太后（少帝の生母）に許可を求めた。

ところが太后は、

「宦官が宮中の諸事万端を取り仕切るのは、古より漢室のしきたりではありませんか。どうしてやめさせることなどできましようや」と、反対してしまふ。

これを聞いた袁紹は、何進に対し、

「四方の豪族や武將連中を多く呼び寄せ、軍を率いて上京させて何太后を脅してみてはいかがでしょう

か？」

と、進言した。何進はこれを良案とし、部下に命じて、早速行動に移らせた。

間もなく、前將軍の董卓、府の掾（大將軍の付属官）の王匡、東郡太守の橋瑁、騎都尉（近衛騎兵隊長）の丁原らが遠路よりやってきて、帝畿（首都洛陽付近）に駐屯するよう命じられた。

駐屯軍のなかで、何進によって騎都尉から新たに執金吾（憲兵隊司令）に任じられた丁原は、首都圏の治安を維持するため、洛陽の北、五十里（約二十キロ）に位置する河陽に移動するよう命じられた。丁原配下の武將のひとりに、かれが并州刺史（并州行政長官）時代に見い出した呂布という巨男がいる。

五原郡九原県（内蒙古自治区包頭市付近）という北の辺境の地にて、呂布はこの世に生を享けた。

そこは、みわたすかぎりの草原地帯であり、かれは五原地方の有力な勢力である鮮卑というモンゴル

系遊牧騎馬民族らと生活をともにしていた。

鮮卑族は遊牧し、主に狩猟で日々の生活を営んでいる騎馬民族であるため、呂布自身も、自ずと弓術や馬術に長じるようになった。

とりわけ腕力においては、中原（黄河中流から下流の平原地帯）の人間に対して、はるかに抜きこんでるほどまでに上達した。

併せて、挑戦的で剽悍な動物的感觉や獲物を仕留める時の味方を統率する能力も自然に身につけていった。

のちに、呂布自身が率いる軍団が海内無双の強さを誇るようになるが、これは草原で鮮卑族とともに狩猟生活をしていきながら無意識に培った兵卒を率いる並外れた統率力にあつたのである。

呂布は「飛將軍」という渾名を持っていた。

その渾名は、前漢最盛期の武帝時代、弓術・馬術ともに優れ、匈奴から「漢の飛將軍」と畏敬された名将李広に由来するものである。

武勇において、李広に匹敵する人物と見做されていた呂布に対し、かれの育った土地の風土が「飛將軍」と呼ばれるに相応しい勇猛さを養い育てきたことは、ほぼ間違いない。

その持ち前の驍武によって、并州の役所に出仕していた呂布は、刺史（行政長官）であつた丁原に見い出されたのである。

丁原は呂布に惚れ込み、既に実父を亡くしていたかれを養子にして、父子の約を成した。

中平六年（一八九）四月、袁紹の進言を容れた大將軍何進の上京命令で、丁原は軍を率いて、并州から南下することとなつた。

さて、丁原は并州の刺史である。刺史という行政の長に、兵卒を率いて都へ来るようにというのが、今回の命令である。

それを承知していた朝廷は、これを機に丁原を騎都尉に任命し、かれが都に到着すると、今度は執金吾という軍職に就けるとともに、近衛兵五十人

ばかりを直屬兵士として与えた。

「これが軍隊とな。さまにならんもんじやのう、奉先よ……」

河陽にやって来た新兵五十人の細身の体を一瞥し、丁原は側で方天戟の穂先を丹念に磨いている呂布に、溜め息をついてこういった。

奉先とは、呂布の字である。

「ああ、まったくだな、オヤジ……」

丁原の視線の方向に首だけを向けて、呂布は応えた。

都にやって来る直前の職は、并州領内の郡太守・相（二つとも行政責任者）の目付的な職限しか任されていなかったで、丁原に、ほんとうの「軍隊」など、有りはしない。

「奉先よ、ちと面倒じゃが、月の半ばぐらいから、太原へ兵士を募りにいってくれんか？ 文遠には雁門に、明文には上党に行つてもらうつもりじやがのう……」

文遠とは、今回一緒にやって来た張遼の字であり、明文とは、侯成のそのことである。

太原は、洛陽の北北西千六十一里（約四百四十キロ）に位置する。

雁門（山西省北部）、上党（山西省南東部付近）はそれぞれ、北へ千三百三里（約五百四十キロ）、北へ五百十八里（約二百十五キロ）のところにある。「わかったよ、オヤジ。あんな鳥がらみてえなやつらだけじゃ、話にならねえしな。今は六月だから二カ月ぐらいみてくれよ、いいだろう？ 太原はオレの故郷に近えから、案外人間集まっちゃうんじやねえんか……」

呂布の故郷、五原郡九原県は、洛陽から北北西に三千六百六十里（約千五百十八キロ）の距離にある。太原からさらに二千六百里（約千七十八キロ）以上も北北西に行つたところを、
「オレの故郷に近えから……」

と、いつてすましてしまうこの男は、いったいどれ

ほどの体力の持ち主なのであろうか。

呂布は続けていう。

「で、オヤジとしちや、太原でどのくらい要るんだい？」

「そうじゃのう、太原でじゃったら、三千人も集めりやええじゃろうて」

「よっしゃ、わかった。明日からちよつくら行つてくらあ！」

方天戟の穂先磨きをひとまず終えた呂布は、丁原のことは快く受け入れて、かれの指示を張遼と侯成にも伝え、さっそく出発の準備に取りかかった。

光熹元年（一八九）六月半ば、呂布は太原に向けて河陽の地をあとにした。

共にかの地に向かうのは、并州の役所時代に知り合つた曹性、高順と若干の従者である。

曹性は字を公武といい、州都晋陽からの八百五十里（約三百五十三キロ）を丁原や呂布らとともにや

つて来た男である。

その道程の途中、水面に柳絮が舞い降りていく様子を視界が許すかぎり視つめていたこの男は、ここに来てようやく人並みに馬を御する力と術を身につけつつある。

衣服を内から照らしてしまうほどの異様な明るさを持った白い肌が、この男の力の弱さ、体力のなさを強く感じさせる。

曹性自身もそのことを十分に弁えている。

かれは、晋陽の町では、諸学に通じ弁舌に優れる文知の人、として知られていた。

一方の高順は字を奉程といい、槍をこよなく愛し、暇さえあれば槍捌きの稽古に勤しむという、槍一筋の典型的な武の人である。

呂布は、あとから并州の役所に出仕してきた曹性について、まず文字を習った。丁原が曹性から教わるように勧めたためである。

いくら驍武の才に恵まれているとはいえ、役人が

文字を知らないのでは話にならない、とおもったのであろう。

はじめはしぶしぶ筆をとっていたこの巨男^{おおおんどこ}であったが、妙に性にあつたのであろうか。

それとも、曹性があたかも母親が幼児をあやすように、巧く機嫌^{うま}をとりながら教えたためであらうか。しばらくして、曹性から多くの文字を教わり、それらを習得していった呂布は、かれの成果を認めた丁原によつて、主簿^{しゅぼ}（文書係）に取り立てられた。

曹性が丁原時代の并州に出仕してきたことは、呂布ひとりだけでなく、ほかの張遼^{ちやうりやう}や侯成^{こうせい}、丁原、高順にも実に好い影響^よを与えた。

かれらは、基本的に文字や学問とは無縁であつた。并州領内で、物知りの少年として少しばかり名を知られていた曹性が、ある日ひよっこり役所にやつて来て、ついにはそこで働きだしてしまつたのである。（あの新米はなかなかの物知りらしいとな。野人の如き^{ごと}こやつらに、ちいとばかり文字や学問みたいな

ものを教えてもらえぬもんかいのう……）

丁原がそのおもいを曹性に打ち明けると、「いいですよ、私でよければお手伝いさせていただきますしょう」

と、曹性は快い返事で受け入れた。

まず呂布が生徒として曹性につき、そのできばえが良かったために、あとの四人についても同じことをやつた。

結果は呂布の時と同じように良好であつた。

なかでも、張遼の呑み込みのはやは曹性の予想をはるかに上回るものであつた。

張遼は曹性が持っていた『孫子^{そんし}』『老子^{らうし}』『莊子^{そうじ}』といった書物を借りて読むこと数度にして、この六月上旬には、それらの内容に関して曹性と対等の話ができるほどになつてしまつたのである。

侯成も、張遼ほどではないが、かなりの成果を上げつつあつた。

呂布と丁原、高順はかれらに続いた。

集団とは異なる性質を持った人間が、集団全体に新しき価値を与え、結果として全体に好い影響を及ぼしたのである。

槍の高順は、この時期の呂布の稽古相手となりうる唯一の人間であつた。

かれの得物は、数種類ある槍の中では最も単純なものだが、穂先から一尺八寸（約四十一センチ）のところにある纓が、普通のものに比べて長く、量も多いのが特徴である。

纓とは、紐の束のことである。多くは糸か獣の毛で作られ、中には色染めされているものもある。高順の纓は、長さ三尺（約六十九センチ）ほどあり、白く染められている。

長い純白の纓は、敵を突き刺した時に流れる血が刃から柄にたれて手を滑らすのを防いだり、演武の時に見栄えをよくしたり、士気を高揚させたりするのに、大いに役立つ。

一方、呂布の得物である方天戟は、全長一丈（約二百三十センチ）もあり、高順の槍よりも一尺（約二十三センチ）長く、穂先に鋼鉄の槍のような尖った刃に加え、その横に三日月状の月刃という刃を、柄に対して左右対称に付けている。

方天戟の呂布に始めはいいようにあしらわれていた槍の高順は、河陽に着いて以降、時折呂布を苦しませる程、腕を上げてきていた。

呂布の特徴的な間合いに、かすかな隙をみることでできるようになってきたのである。

（奉程の野郎、すこしはましになったようだぜ……）
呂布にこうもおもわせるといふことは、并州以来の稽古の成果が、ようやく今になって出てきたことの証である。

（やっと、奉先のアニキのまともな稽古相手にさせてもらつたような気がするなあ……）

そうおもいながら、高順は前方に延々と続く太原への道を、一步一步あるいていく。

左隣には、曹性せうせいがいる。

曹性は、左脇に一冊の擦り切れた『孫子』教本を、まるで生まれたての赤ん坊を母親が腕のなかで慈しむかのように抱えている。

かれが、さまざまな学問に通じ、弁舌に優れた知の人であることは、前述した。

そのなかでも、『孫子』については熟知しており、今、左脇に抱えている『孫子』教本は、綴じ紐とひもが何度も切れてしまっている。

『韋編三絶いへんみつたぎ』とはこういうことをいうのであるう。

かれは『孫子』と少年時代に邂逅かいこうし、寢食を忘れるくらいに熱中した結果、殆ど諳んじてしまうほど、憶えてしまっていたのである。

二十世紀末の現在、古今東西の兵法書といわれて、真つ先におもい浮かべるのが、『孫子』という人は少なくない。それくらい『孫子』という兵法書は人

口に膾炙かいしやしているといつてよい。

『孫子』は、中国を代表する兵法書であるのみならず、おそらく現存する兵法書の中で、世界で最も古いもののなかかもしれない。

更に、ただ古いというだけでなく、書かれてから二千年以上たった今日、兵法の粹からはなたれて豊かな応用の可能性に満ちている。

この幅の広さが『孫子』を稀書たらしめているのである。

『孫子』の著者ははっきりしていない。

春秋時代の兵法家孫武とも、戦国時代の兵法家孫臏そんともいわれているが、一九七二年に、山東省銀雀山の漢代初期の墓から『孫子』のほかは孫臏の兵法の竹簡が出土したことから、孫武著者説が有力視されている。

後世、ナポレオンが『孫子』を常に傍らに置き、座右の書としていたことは有名である。

第一次世界大戦を引き起こしたドイツ皇帝ウイル

ヘルム二世は、敗戦直後に『孫子』を知り、
「二十年前にこの書物を読んでいたら、我がドイツ
はどうなっていたであろうか……」
と、述懐したという。

『孫子』が代表的な兵法の古典として、ひろい地域に影響を与えてきたことは、古来、その注釈書がおびただしい数に上っていることから、うかがい知ることができる。

現存する最古の注釈書は、三国時代に魏ぎの曹操そうそうの著した『魏武注孫子』という書物だが、曹操以来、中国人の手による注釈書は、百五十種以上を数える。中国のみならず、日本においても『孫子』は深い痕跡をとどめている。

『続日本紀』によると、唐に留学した吉備真備きびのまきび（奈良時代の学者、政治家。その学識は菅原道真と並び称される）が『孫子』をもたらし、とある。

また、室町時代後期の大名である武田信玄が、つとに有名な『風林火山』の旗印を『孫子』の軍争篇

からとったことは、大変よく知られているところである。

『孫子』に書かれている基本姿勢は、客観的な判断を強調する点にある。その思想や主義主張は『老子』に重なる部分が少なくない。

万物を固定物としてではなく、変化進展においてとらえようとする点は、『孫子』『老子』ともにみられる。

『老子』には「上善は水の如し」とあり、『孫子』には「兵の形は水に象る」とあるように、「水」にみられる多様性を重視した考え方は、人の理想的な処世術をも、同時に表しているかのようである。

対立している物が相互転化を繰り返すことによって、万物は変化進展する、という『老子』『孫子』のなかの弁証法は、戦国時代の対立抗争と興亡の間から生存の術として汲み取られてきたものである。

『孫子』の魅力は、内容のひとつひとつが人間に對する深い洞察によって裏打ちされているところに